教育学部

わが学部の「自己点検・評価」を点検・評価する

教育学部
自己点検・評価委員会
委員長
吉森　護

▼教育学部では、平成四年度、各学科・専修の「理念・目標及び将来構想」と「各種委員会の運営」を重点事項として、自己点検・評価を実施した。全学と同じ重点事項としたのは、本学部においても、まず最初に取り組むべきポイントであると判断したからに他ならない。実施のための準備は、平成四年十月の自己点検・評価委員会の発足以来、平成五年二月十七日の実施説明会に至るまで、八回の会合を重ね、十分行ったつもりである。その間、再三にわたって、教官会で委員会の審議経過の報告も行った。約二ヵ月を実施期間とし、四月十九日を提出の期限として報告書を集めた。本学部に関する各種資料と合わせ、「教育学部白書」として、この秋、刊行の予定である。

▼今回実施して得た体験をもとに、以下、自己点検・評価にまつわるさまざまな問題点を並べてみる。学部として恥かしいことだが、自己点検・評価の精神にのっとり、その内情を赤裸々に報告することにしたい。

(1)構成員の間の合意に関する問題　大学(院)設置基準が改定され、自己点検・評価への取り組みが努力規定として盛りこまれて以来、二年あまりになるが、まだ、構成員の間のその受け止め方は一様ではないようである。面倒なことが押しつけられた、概算要求のためやらねば仕方がない、といった消極的態度も少なからずある。積極的な者も多くはない。そんなわけで、自己点検・評価をどのように受け止め、どう進めるかについての構成員の合意形成が十分出来ていない。もっとも、自己点検・評価体制が教育研究活動の活性化と水準の向上に寄与するかどうかについて意見が分かれ、さまざまな懐疑があるなかでは合意がないのは、当然なことで、全国どこの大学でも同じ状況だと思うが。実施前にもっと、学部内で論議しなければならなかったことは確かであろう。

(2)自己点検・評価に臨む態度の問題　自己点検・評価はすべての構成員一人一人が自らの活動を積極的に点検・評価することを旨とする。学生を含めすべての教職員が点検・評価の主体である。残念ながら、今回の実施状況をみると、学科・専修等の教室や委員会の点検・評価がごく一部のメンバーに委ねられている場合が多かったようである。他人任せである。報告書に目を通したとしても、誰かが書いたのを回覧しただけのようである。問題は、その前に全員による自己点検・評価のための真剣な提案や討論があったかどうかである。積極的非協力というわけでもあるまいが、報告書の提出をハードコピーとともにフロッピーで求めたのに、約束した規格を守らなかったり、フロッピーを提出しなかったのが多かったのには壁易した。自己点検・評価の実施状況についてのアンケートの回収率もきわめて低かった。実施要項をよく読まず、説明会での話をよく聞いていないのである。その証拠にあらためて催促すれば、「そうですか」と悪びれずに提出する。大学においては、自分の研究のこと以外、われ関せず、誰かがやってくれるであろう式の態度はきわめて一般的(?)であるが、このような態度では今後自己点検・評価体制はその実をあげないことは明白であろう。

(3)報告書の在り方の問題　誰でも自分を厳しく見つめることは難しい。まして、それを人前に公表するのは難しい。しかし、自己点検・評価という限り、自分が「顔を赤らめる」部分も積極的に摘出しなければならない。今回、点検の仕方が甘いのか、報告の段階で曲げられたのか、内容のあまりない(?)タテマエ報告が多かったように思う。厳しさが欠けているように思う。読んでみると、単なる「学科紹介」になっている。問題があると考えられるのに、である。いくら気取っても底は割れている。やはり、点検・評価をなんのために行うのかが分かっていないのかと思ってしまう。自己点検・評価報告が組織あるいは個人の利益を図るために、あるいは逆に不利益を隠すために意図的に操作されることがあれば、それは無意味であるばかりでなく、時間の浪費あるいは改善・整備を阻む有害なものにさえなる。

(4)時間がかかりすぎる問題　今回は、教室や委員会に対する自己点検・評価の実施依頼からその報告書の提出までの期間を二ヵ月間とした。それに対して、一部ではあるが、「期間が短すぎて、十分検討する余裕がなかった」という意見があった。二ヵ月という期間が短いかどうかについては、検討内容や手続き次第であり、メンバーの忙しさや時期にもよるし、反論するつもりはない。なにしろ今回は、初めてのことだし、どれくらいの期間をおけばよいのか実施を企画した委員会もわかっていないのだから。だから、ごく一般論として、点検・評価のための視点も示されているのに、この程度のことに時間がかかりすぎるのではないか、もっと迅速に対応出来ないか、まるで役所仕事ではないか、とだけ言いたい。

▼これらの問題の根っこは一つ。危機意識が足りないのでは、と思う。